

## V. 2. 新任教員のプロフィール〈自己紹介〉

### ○豊中キャンパス

言語文化専攻

言語情報科学講座 准教授

山本 武史

自己紹介として「宇宙と言語」について書こうと思う。この宇宙には何千億という星があって、その中にはある確率で知的生命体が存在し、彼らがコミュニケーションのために用いる言語は…そんな壮大な話ではないので念のため。

何がきっかけだったか忘れたが、小学校5年ぐらいのときに星に興味を持った。友達と天体望遠鏡の専門店に行ってカタログを集めたり、小遣いを出しあって天文雑誌を買ったりした。祖母が天体望遠鏡を買ってくれ、ネオンであまり星が見えない大阪の夜空でいろいろな天体を探して、見た。学校の教科の中では理科が好きで、卒業文集に将来の夢は「天文学者になること」と書いた。

中学生になって英語を習い始め、興味を持った。正確に言うと、興味を持ったのは中学校の授業を通してではなく（先生、ごめんなさい！）、小学校卒業直後の春休みに通い始めた学習塾のK先生の授業の中であった。阪大の理系学部を出た彼は、高校までは英語が苦手だったが大学でドイツ語に触れて言語の論理性に気づき、英語も一から勉強し直したという。まだ中学にも入学していない私たちに発音記号から教えてくれた。その発音記号にハマった。高校へ進学。進路を決めるにあたって、天文学者になるべく迷わず理系を選択した。しかし、クラブ活動（体操部）に明け暮れ、成績は…（略）。当時、天文学科・宇宙物理学科がある大学は日本で3つだけで、そのうちの1つを受験したが当然不合格。

滑り止めで受けた大学の理学部物理学科に入学したが、なじめなかった。それならば外国語を専門的に勉強しようと思いその大学を中退し、大阪外国語大学英語学科に再入学。出願直前までドイツ語学科と迷っていた。

大学で英語や他の言語を勉強するうちに、言語の仕組みに魅かれるようになる。別の大学の大学院に進学し、言語学を専攻することになった。（口の悪い高校のときの友達からは、大学入試のリベンジかと言われた。）

進学先は文学研究科。最初の大学が理学部、今度は「文学部」なので、いわゆる「文転」したことになるが、入ってみると文系・理系といった区別はほとんど無意味であることが判った。理学部や工学部を卒業した人、文学部出身だがコンピューターが非常に得意な人、英語より数学が得意だった人がごろごろいた。

宇宙は果てしなく広く謎だらけで、人間が知っていることはそのごくごく一部である。

しかし、言語の世界も実際に入ってみると果てしなく広く分からないことばかりであった。星は遠くて機器で観測するしかないが、言葉は自分や周りの人が話している非常に身近な存在である。宇宙を研究するという夢は実現しなかったが、その代わりに言語の仕組み、特に音韻論を研究するようになった。これも発音記号を教えてくれた K 先生のおかげである。

自分の夢が実現できなかったという経験は多少なりとも誰にでもあろう。また、その代わりに次の目標が見つかるというのも珍しいことではない。そして、それは案外、実現できなかった昔の夢と同じようなものであるのかもしれない。

## 言語文化専攻

言語認知科学講座 准教授

高橋 克欣

2018年4月から木内良行先生の後任として言語文化研究科でお世話になっておりますが、着任からあつという間に1年近くが経とうとしております。大阪大学の出身ではなく、研究員や非常勤講師として大阪大学でお世話になったこともなかった私にこのようなご縁が巡ってくるとはつゆほども思っておりませんでしたので、今でも豊中の研究室でこうして日々の業務を行っているのが何だか夢のような不思議な気持ちがしてなりません。

私は神奈川県茅ヶ崎市にて生をうけた後、3歳からは秦野市という丹沢山地の麓にある田舎町でのんびりと、大学卒業までの20年近くを過ごしました。母方の祖父母が九州で暮らしていたこともあり、幼少期より「ことば」のちがいや不思議さ、面白さに魅せられ、大学受験生の頃には方言学を志したこともありました。

高校の国語教師のご助言などいくつかの理由があり、大学の第二外国語科目として選択したフランス語でしたが、母校のフランス語・フランス文学の先生方のお人柄やお話に惹かれ、気がつくやうにフランス文学専修に籍を置くという、大学入学前には考えていなかった進路を選択しておりました。それから現在に至るまで、本当に予想外のできごとの連続の人生を送ってきたように思います。

学部生時代は交響楽団の活動などに多くの時間を費やし、学業に真剣に打ち込まなかった反省の気持ちもあり、大学卒業後は学問的にも人格的にも尊敬できる師のもとで精進することを決意して大学院に進学し、その後フランス・ストラスブールへの1年間の留学、前任校での2年間の勤務を経て現職に至ります。

20代後半から30代前半の修業時代には思いがけず、今はなきフランスの在外教育施設に約4年間勤務し、地元の商店や農家に体験学習の受け入れをお願いしたり、セネガルでのボランティア活動の引率をしたり、高3クラスの学級担任として受験指導をしたり…と、

いろいろ経験してまいりましたが、40歳となる節目の年にこのような恵まれた研究・教育環境で自分の専門を活かした仕事をさせていただく機会を授かり、まことに感謝の念に堪えません。

学生時代からの狭義の専攻分野はフランス語学およびフランス語教育ですが、もともとは我々人間が世界のできごとの時間的推移をどのように認識し、それを言語化しているのか、という問題に特に関心があり、その意味では言語の別を問わず、所属講座名のとおり「言語」と「認知」の関係が研究テーマであるということができると思います。

「不惑」にはほど遠くあれこれと戸惑ってばかりの毎日ではありますが、フランス語学およびフランス語教育に加え、これからはより学際的かつ国際的な分野である言語文化学のさらなる発展に微力ながら寄与することができるように、これまで以上に精進してまいり所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

## 言語文化専攻

### 言語認知科学論講座 助教

大神 雄一郎

2018年4月より言語文化専攻（言語認知科学講座・英語部会）にて助教としてお世話になっています。大阪府茨木市で生まれ育って高校卒業までは地元で過ごし、同志社大学文学部英文学科を卒業後には株式会社ワコールに勤務していました。数年間の会社員生活を経て退職し、同志社大学科目等履修生として教員免許を取得後に本研究科の博士前期課程に入学、修了後は続いて博士後期課程に進み2017年3月に言文で博士号の授与を受けました。修了から1年間の非常勤講師生活を経て現在に至ります。

専門分野は認知言語学で、主に日本語と英語を対象に、言語表現の意味拡張や意味変化に関する研究に取り組んでいます。学部生時代には言語学を学んだ経験がなく、言文に入学した当初は大学院入試のために身につけたわずかな知識を持つばかりで、専門とする分野において著名な海外の研究者の名前も読めないという有様でした。そのような状態で言語研究の道に進むことになったきっかけは、下着まみれの会社員時代に、身体感覚や身体への見立てが人間にとっての意味や価値に与える影響に興味を持ったことです。こうした背景もあり、言語と身体性の関わりに特に強い関心を持っています。

語学教育に携わる身であるものの海外留学等の経験がなく、実践的な語学力の不足を懸念していたのもあり、博士後期課程在学時からは毎年できる限り海外で開催される学会に参加するようにしています。ここ数年は英語コミュニケーションの訓練の場として、また、もちろん研究成果を世に問う場として、年に数回は研究発表を行いに掛けるようにし、国内学会とは違う雰囲気浸ったり、質疑応答にあたふたしたり、馴染みになった他国の

研究者らと交流したり、というのが楽しみの1つになっています。身の程をわきまえず出張で助教室を空けている時があるかと思いますが、ご容赦いただけましたら幸いです。

私生活では、妻と3人の子供とネコに囲まれ、というより支えられ、慌ただしくも楽しく過ごしています。本来は体を動かすのが好きで、高校と大学では勉強に目もくれずラグビーに勤しみ、社会人になってからも空手や柔術の稽古をしていましたが、最近はなかなか運動する時間がとれず、止まるところを知らない体脂肪率の上昇に悩んでいます。

企業を退職してから現在の職に就くまでの間は、小学校の介助員、中・高や他大学の非常勤講師、その他いろいろなアルバイトを行いながらろうじて生計を立てる生活で、経済的、体力的には地獄を見た気がします。現在は、自身の業務効率の悪さから仕事に追われつつも、仕事があることに感謝の毎日です。大きな「志」を掲げるような立場でもありませんので、とにかく自分の仕事を1つずつこなしていければと思っています。この原稿を提出する時点で任期も残り2年ですが、引き続きご指導、ご鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。

マルチリンガル教育センター

英語部会 特任准教授

Ivan BRENES

I am delighted to again be at the Graduate School of Language and Culture. I first taught here 2006-2012. Before then, I had taught speaking, reading and writing full-time at Kobe University's Faculty of Economics. This was my first full-time teaching position after I had finished my graduate studies in International Relations at the University of Pittsburgh in 1993.

It was at Kobe University (2000-2006) where I developed a keen interest in endangered languages and the linguistic marketplaces of the world. We all know the key linguistics story of the 21st century: Often because of rational economic drives, sometimes with little freedom of choice, speakers of minority languages are shifting to dominant ones at alarming rates.

In addition to my concurrent research in language endangerment, teaching the prestige language of English has also allowed me to reflect on issues of language revitalization. By the time I started teaching full-time for an Osaka-University based Leading Program for graduate students, the Cross-Boundary Innovation Program (2012-2018), I was confident in my techniques for teaching academic writing, presentation techniques, and discussion skills: 1) create content that is practical and engaging, and 2) create a classroom atmosphere where students feel comfortable.

In fact, in the case of severely endangered languages, we also deal with young people who are learners. The first item above — fostering motivation — is amorphous as individuals can be

motivated to do different things. I can motivate students to deliver effective presentations, and semi-speakers of endangered languages can be motivated to speak for five minutes (before switching back to the majority language). The second part — creating and maintaining the domains where a language can thrive — is a monumental challenge for smaller languages. My students, in contrast, will have access to English, even if they never do another presentation.

My present research at Osaka University focuses on how a writing system and identity with it can nudge language revitalization efforts. These studies comprise part of the sociolinguistics of orthography, and look especially at the linguistic landscape —the public displays of written language — for endangered languages, especially in the case of Ainu in Hokkaido. It can be through a language's written expressions and its wider use that a language can garner precious prestige and utility. Indeed, for many people, a language written and revered is a language never truly dead.

マルチリンガル教育センター  
マルチリンガル教育開発オフィス  
田中 美津子 講師

2019年4月から新カリキュラムが実施されるのに伴い、昨年4月よりマルチリンガル教育センターでカリキュラム改革・プログラム運營業務に携わっています。私はこれまで、一般企業での翻訳など研究とは無縁の仕事や日本語教育に従事していた期間が長く、専任教員として英語教育に携わるようになったのはほんの5年前のことです。博士時代には、非常勤講師として英語も教えてはいましたが、博士論文のテーマに選んだのは中国人日本語学習者の漢字学習に対する動機づけ（日本語教育の内容）でしたので、当時は英語教育の世界に本格的に身を置くようになるとは思いませんでした。とはいえ、英語教育も日本語教育も同じ外国語教育、共通する点も数多くあります。また、これまで日本語・英語を問わず多くの教育機関で教えたことがあり、多様な教育法・プログラムを経験することができたので、その経験をマルチリンガル教育センターでの職務にも活かせればと思っています。

前任校（立命館大学）では、プロジェクト発信型英語教育のプログラムを行っていました。プロジェクトベースの授業では、学生が主体となりプロジェクトを推し進め、その成果をプレゼンテーション、レポートの形で発信することが求められるため、課題は非常に多く負担を感じる学生もいました。しかし、クラスメートと知恵を出し合い楽しみながら勉強できるのもこの授業の特徴です。笑顔で楽しそうに学んでいる姿を目の当たりにしたり、学期を通して学生の成長、学習の伸びを実感できたりするため、教員としても楽しく、

またやりがいのある形態の教育法であるように思います。新カリキュラムの総合英語の一つにプロジェクト発信型英語のコースがあることもあり、プロジェクト発信型英語プログラムの発展にも貢献していけたらと思っています。

私の専門は、第二言語習得における学習者の個人差（動機づけ）と評価（特に、パフォーマンス評価）です。博士時代には様々な統計手法を学ぶ機会があったため、私のほとんどの研究は統計を用いた量的研究で行なっています。個人差の研究では、様々な状況において動機づけに影響を及ぼす要因を検証し、学習者の動機づけを高める教育的示唆を得、教育に還元していけるよう努力しています。また、評価の研究では、プレゼンテーションの評価、特に学生間相互評価に着目し、その信頼性、妥当性の検証や、よりよい評価法・基準の設定に関する研究を行っています。マルチリンガル教育センターの業務の中には、プログラムをよりよいものにするためのプログラム評価という仕事もあります。これまではカリキュラム改革準備・プログラム運営の補佐をさせていただきましたが、今後はプログラム評価業務にも貢献していけたらと思っています。

マルチリンガル教育センター

マルチリンガル教育開発オフィス 特任助教（常勤）

柳田 亮吾

2018年10月より、工学部・研究科国際交流推進センターからマルチリンガル教育センターに赴任致しました、柳田亮吾と申します。

前職では、部局横断型プロジェクトであるアジア人材育成拠点形成事業（Center for the Advancement of Research and Education Exchange Networks in Asia : CAREN）の特任助教として、理工系学部・大学院の国際化のための業務に従事しておりました。業務の中心は海外の大学と学术交流協定あるいはダブル・ディグリー・プログラムの協定を締結することでしたが、加えて海外大学から学生を大阪大学に招へいする、また、大阪大学から海外の大学に学生を派遣・引率するといったことも行っておりました。科学に国境はないとは言いますが、工学・基礎工学・理学・情報の各研究科にそれぞれ英語のみで学位（修士号・博士号）の取れる英語特別コースが複数あり、先生方が英語のみで講義を行い、研究室で多くの留学生を受け入れてらっしゃるというのは、CAREN 赴任当初、それまで文系の世界に浸ってきた私にとって非常に新鮮な驚きでした。特に英語特別コースに関与し、英語で授業を行っている工学部・研究科の先生方は、日本人学生の英語力も伸ばしたいという思いから、英語での教育に工夫を凝らし、熱心に取り組んでおられることを知った時には、大きな感銘を受けました。こうした工学部・研究科における国際化への熱い想いに鼓舞され、私自身も2017年度より工学部の学生を対象とした全学共通教育科目（当時）の「実践英語」、

「専門英語基礎」の担当をお願いし、教鞭をとらせて頂いております。

こうした CAREN あるいは工学部・研究科での経験を活かし、マルチリンガル教育センターでは、理工系学部生向けの e-learning コースのコンテンツ開発を中心に取り組んでいきたいと思っております。また、微力ではありますが、学部 1・2 年次対象の英語教育とその後の部局での英語（での）教育を「つなぐ」橋渡しのようなことができればと考えております。私を知る限り、大阪大学では様々な組織（全学共通教育機構：マルチリンガル教育センター、国際教育交流センター、各部局・専攻など）が多様な形で英語（での）教育を行っていますが（全学共通教育：マルチリンガル教育センターの外国語科目、多言語カフェ・English café、短期海外派遣プログラム、部局での英語での講義など）、それらは有機的に関連しあっているというよりかは、個々がばらばらに教育プログラムなり科目を提供しているのが現状のように思えます。マルチリンガル教育センターでは、大学内に学生が自主的に外国語を勉強できるマルチリンガルプラザの設立を構想しており、おこがましくも、そこで私の経験が少しでも活かされればと思っております。

以上雑多なご挨拶となりましたが、マルチリンガル教育センターにて大阪大学の外国語教育の改革に微力ではありますが、精一杯尽力する所存です。何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

## ○箕面キャンパス

言語社会専攻（タイ語）助教

日向 伸介

2018年4月に着任いたしました、日向伸介と申します。東南アジア大陸部のほぼ中央に位置するタイ王国の近現代史、特に政治と文化の関わりについて研究をしております。

生まれも育ちも岩手県盛岡市で、東京の大学に進学するまで海外はおろか県外にもあまり出たことがありませんでした。「ここではないどこか外の世界」に関心を持ち始めた最初のきっかけは、NHK教育テレビ（現Eテレ）で放送されていたアメリカの子供向けテレビドラマだったような気がします。それから音楽、映画、文学とジャンルを問わず、おもに英語圏の文化に傾倒していきました。外国に憧れる田舎の少年にとって、英語は外の世界と自分を結びつけてくれるかもしれないこの上なく魅力的な言語であり、唯一楽しんで勉強することのできる科目でもありました。大学学部時代はその流れで英文学を専攻し、親しい先生に頼んで読書会を開き、4年かけてシェイクスピアのソネット154篇を読みました。また、高校時代に偶然耳にしたアイルランド音楽にはまっていたので、大学でもアイルランド文学・文化関係の授業をよくとり、アイルランド語も3年ほど学びました。

このように欧米一辺倒だった自分が日本・アジアにも関心をもつようになったのは、英語の授業で親しくなった他学部の先輩がアジア好きで、高田馬場界隈のビルマ料理屋によく連れていってくれて、アウンサンスーチーの写真の背に「ひなちゃん、これからはアジアだよ」と熱く語ってくれたからでした。その先輩の強い影響で初めての海外旅行はタイに行きました。学部時代に交換留学は是非してみたいと考えており、留学先に迷いましたが、それまで唯一行ったことのあるタイのタムマサート大学を選びました。私とタイの関係は、このときから始まります。また、留学から帰国した後、アイルランド人の父をもつラフカディオ・ハーン（小泉八雲）についてある授業で調べてから、アジアにおける西洋近代のインパクトに関心を抱くようになったこともあり、大学院は京都大学のアジア・アフリカ地域研究科に進み、タイの近代史を学びました。私がおもな研究対象としているダムロン親王（1862～1943）は、近代国家形成期に官僚かつ学者として、英語教育を受け、欧米の最新の知識をとり入れながら、タイの歴史や学問の基礎を築いていった人物です。

こうして振り返ると、大学という場所から、自分がいかに多くのものを得たのかということがよく分かります。新しい知識、思考、人との出会いが、全く新しい可能性を生むかもしれない自由な場所が大学であるということを学生の皆さんに伝えていくことができればと考えています。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。



## 言語社会専攻（ハンガリー語）准教授

鈴木 広和

1995年4月に大阪外国語大学ハンガリー語専攻に着任しました。阪神淡路大震災から間もない頃だったため、なかなかアパートの空きが見つからない状況でした。高校までは静岡県、大学からは関東に住んでいたため、関西に住むのは初めてでしたが、今はもう、大阪に住んでいる年月が最も長くなりました。それでも関西弁は話せません。住居はその後、箕面市内で2度引っ越しましたが、研究室は箕面キャンパスの中で3度、さらに箕面キャンパスから吹田キャンパスへと引っ越しました。

吹田キャンパスに移ったのは、大阪大学と大阪外国語大学の統合時に、人間科学研究科・人間科学部（以下、人科）に所属することになったからです。といっても実際に研究室が吹田キャンパスに移ったのは、統合の7年後でした。人科では、統合時に新しく設置されたグローバル人間学専攻の教員となりました。新しい専攻の立ち上げにあたり、統合前からカリキュラム作りをはじめ、かなりの準備作業が必要でしたし、始まってからも新専攻の運営は常に手さぐり状態でした。しかしそのグローバル人間学専攻も、研究科改組により廃止されることとなり、2016年4月から、人科内に新しく設けられた未来共創センター所属となりました。未来共創センターの主たる目的は人科と社会をつなぐことでしたが、センターには学生がいないため、基礎人間学講座・比較文明学研究室で学生の教育指導にあたっていました。その間、マルチリンガル・エキスパート養成プログラムの立ち上げ時から、ワーキンググループおよび運営協議会で、人科選出の委員をつとめました。外国語学部／大阪外大から人科に移籍した教員として、人間科学部から、外国語学部生のためにできるだけ有意義なプログラムを提供できるよう、5年間、精一杯つとめました。

そんななか、文系各部署から外国語学部／言語社会専攻にポストがいくつか「返却」されるかもしれないという話があり、2018年4月より、言語文化研究科に移籍することとなり、研究室は再び移動し、箕面に戻ってきました。言語文化研究科に所属するのは初めてですが、外国語学部および言語社会専攻はいわば古巣であり、10年ぶりにふるさとに戻ってきたように感じています。戻ってきて、箕面地区の皆さんの温かさに触れながら働けることに、あらためて感謝の気持ちを覚えています。

2018年度は、10年間のブランクを少しでも埋めようと、ハンガリー語専攻の教育と運営に専念することにしましたが、2019年度からは言語文化研究科・外国語学部の運営にもしっかりと携わらなければなりません。研究分野は中世ハンガリー史です。ハンガリー語専攻に戻ってきて、しばらく手つかずであった研究テーマにも取り組めるようになりました。

2年後には新箕面キャンパスへの引越しが待っています。また引越しですが、研究室の引越しにはもう慣れました。他方、改組にも慣れましたが、こちらのほうはやや食傷ぎみです。ベック人のエスニック・アイデンティティの拠り所としてのフランス語、シンガポールのナ

ショナル・アイデンティティの拠り所としての英語など、実は珍しいことではありません。つまり、アラビア語をアイデンティティの支柱とする人々を「アラブ」と定義する単純な図式は、アラビア語の「世界語」としての側面の看過しているのではないか、ともいえるかもしれません。今後、同僚・学生の皆様と一緒に、こうした議論を深められればと期待しています。宜しく願いいたします。

## 言語社会専攻（デンマーク語）特任講師 大辺理恵

2018年12月より言語文化専攻デンマーク語部会に所属しております。出身は石川県金沢市です。高校時代は野球やサッカーなどスポーツの盛んな星稜高校で過ごしました。甲子園の応援では何度か関西へ来たことはあったものの、大阪に住むことになったのは、大阪外国語大学へ進学したことがきっかけでした。今では金沢で過ごした時間よりも大阪で過ごした時間の方が長くなりつつあります。

大阪外国語大学でデンマーク語を専攻し、大阪外国語大学大学院の博士前期課程へと進学しました。その後、同大学院博士後期課程へと進学をしたものの後に退学をし、最終的にはデンマークのロスキレ大学に博士論文を提出し博士号を取得しました。デンマークには、コペンハーゲン大学への留学時代を含めると、約4年弱滞在しました。この留学期間も含め、デンマーク語を勉強し始めてすでに20年が経過しました。この間、デンマークそしてデンマーク語を通して素敵なお方々との出会いに数多く恵まれました。私がここまでデンマーク語を続けることができたのは、日本そしてデンマークで私にデンマーク語を教えてくださいました先生方や共に学んだ仲間、デンマーク人の友人たち、そして常に支えてくれた家族のおかげです。

また、デンマーク語を学んだおかげで、基礎からきちんと学んだわけではないにもかかわらず、スウェーデン語やノルウェー語（ブークモール）も理解することができ、私はデンマーク語を使って、相手側はスウェーデン語やノルウェー語を使ってコミュニケーションをするという貴重な体験をすることができました。現在私がお世話になっているデンマーク語部会・スウェーデン語部会では、そのような光景が日常的になっていることも非常に刺激的で嬉しく思っています。

専門は、デンマーク語学です。現在の自分自身の興味は、デンマーク語において「モダリティ」に関連する分野（法助動詞や心態詞の機能）にあります。日本ではデンマーク語を専門にする研究者がまだまだ少数のため、あまり枠にとらわれ過ぎずに色々な分野に精進し、デンマーク語文法のより詳細な記述に取り組み、日本におけるデンマーク語教育のさらなる発展に寄与したいと考えております。またこれまで大変お世話になったデンマークに

も少しは恩返しができるよう、微力ではありますが、デンマークにおけるデンマーク語学にも将来的に何らかの学問的な寄与ができるよう挑戦していきたいと思っています。

最後になりますが、今後皆さまに色々な場面でお世話になることと思います、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

言語社会専攻（スペイン語）特任准教授

**Josefa GARCÍA NARANJO**

Although I was born in Almeria, I have lived all my life in Málaga, a city of three thousand years old in which was born one of the greatest geniuses of painting, Pablo Picasso. Andalusia, land of a wide and rich history, belongs to Europe, but is a few kilometers from Africa and has a very special link with America, since Christopher Columbus ships left Andalusian ports and many of the first settlers took it beyond of the Atlantic the way of being and speaking of the Andalusian people.

I got my Degree in *Hispanic Philology* at Malaga University and shortly after finishing my degree, I began working as a teacher in the Spanish Courses for Foreigners at the Malaga University. Since then my main objective has been the constant improvement of the teaching of Spanish and I have been very interested in motivation and good atmosphere in the classroom, to encourage communication, especially understanding and oral expression. I always combined my didactic work with the publication of articles, books and materials in order to help in the teaching of second language. I have also dedicated to the publication of articles and books focused on the use of literature in the Spanish class. Later I got the Master's Degree of *Didactic of Spanish as Second Language* at the Antonio de Nebrija University at Madrid, with a thesis in which I used the texts written about Spain by English and American authors.

From a young age I felt a special attraction for Japan and its culture. Therefore, when I was offered the opportunity to work for two years at the University of Foreign Studies in Kyoto, I did not think twice. During those years I worked on the use of translated texts of Japanese Literature to teach Spanish language.

In am currently finalizing my PhD *Linguistic and Literary Studies, Theory and Application* at EIDUNED, International School of Doctoral Studies of the National

Spanish University (UNED), focusing my research in the field of Lexical Availability, without abandoning my goal of improving communication within the classroom. Since the last course, I have been a conversation teacher at Osaka University and thanks to that I will have the opportunity to continue my research on lexicon, literature and oral education, aimed at Japanese students.

日本語・日本文化専攻 助教

小池 康

2018年4月に着任し、早一年が経とうとしています。

出身は群馬県です。群馬県群馬郡群馬町という冗談みたいな名前でしたが、平成の大合併の影響で今は高崎市になってしまいました。市になったとは言え、育った場所は市街地と山（榛名山。伊香保温泉があります）の中間地帯にあるため、華やかならず静かならずといった、どっちつかずの場所です（そこがまた良いのですが...）。

その後、新潟、「茨城」、東京と関東地域をうろうろし、中でも「茨城」には20年近く住んでいました。そして、2018年の3月に生まれて初めて関西方面に引っ越してきたのですが、住所は「茨木」でして、なかなか「イバラキ」の呪縛からは抜け出せない感じです。

現在、箕面キャンパスより徒歩10分ほどの所に住んでいますが、春から初夏にかけてはウグイスの鳴き声の輪唱をバックに通勤したほか、「イノシシ注意」や「猿が出た」の注意喚起の掲示やメール、また豊中キャンパスでは草むらの中に狸を見たりなど、どっちつかずの場所で育った者には経験したことがないようなことをいろいろ経験させてもらいました。

専門は、もともとは日本語の変化、特に近現代の日本語文法の変化をテーマに博士論文を書いたのですが、ちょっとした因果で日本語教育に従事していました。ですから、日本語学にも日本語教育学にも造詣が深い...と胸を張って言えればいいのですが、そこがまた残念なところで、ここもどっちつかずの状態でおります。

本学では、日本語の文法を中心に日本語学および留学生の日本語の授業を担当しています。これまでは主に留学生に日本語を教えることを中心にしてきましたので、日本人の学生、おまけに日本屈指の大阪大学の学生に教えるということでもいろいろ準備も大変でしたが、その準備の中でいろいろと学問的に再考・再確認することも多く、学生以上に自分の勉強になってしまったのではないかと考えています。

研究の面では、日本語の動詞、中でも自動詞と他動詞（自他動詞）に関心があり、これらの動詞の語形的な特徴に基づく規則性について考察しています。

先にも書きましたように、私はこれまで留学生に日本語を教える業務に携わってきました。その文法教育の中で、初級後半から徐々に自他動詞は導入されていきます。その概念的

な意味は、多くの外国語で動詞の自他の現象が見られることもあってか学習者はすぐに理解はできるのですが、日本語においては具体的にどの動詞が自動詞でどの動詞が他動詞なのかを判別する適当な規則がないため、動詞の使い分けを定着させることは難しいとされています。そこで、本当に自他動詞には語形的な特徴に基づく規則性はないのかという疑問から、自分なりに探ってみようと思ったわけです。

そして、この研究テーマを軸に、さらにはその他の動詞や形容詞などの用言についても考察を深め、自分なりの体系を組み立てていけるように考究していきたいと考えています。その際、できるだけ「説明をしやすい文法・説明を理解しやすい文法」になるよう心掛けていきたいと思っています。

## 日本語・日本文化専攻 特任助教 李 偉

こんにちは。2018年3月本学で博士号を取りました李偉です。2018年4月から2年間の予定で言語文化研究科日本語・日本文化専攻の特任助教として教育・研究活動を行っております。貴重なチャンスを与えられましたことを、大変光栄に存じます。

まずはわたしの略歴についてです。2002年山東師範大学に入学し、日本語を学び始めました。その後、日本語教育に関する理解を深めたいと思い、2006年に大学院に進学し、2009年に修士号を取得しました。2009年から2014年までは中国の理科系大学で日本語教育に携わっていました。個人的には、視点に着目した文法習得に興味を持っています。半年の研究生の段階を経て、2015年4月、大阪大学大学院言語文化研究科日本語日本文化専攻博士後期課程に入学しました。2017年12月博士論文を提出し、2018年3月博士号を取得しました。

次に、わたしの教育・研究活動についてです。私は日本語教育学を専攻にしていますので、教育理論と中国の日本語教育現場との結びつきについて、興味を持っています。視点に着目した文法習得に関心があると述べましたが、特に受身に関する問題に興味を持っています。視点に着目して日本語の受身文の習得研究をこれまで進んできました。場の言語学の理念を視野に入れて、「日本語の受身文の習得の促進のための文脈構築の方法に関する研究」をテーマにして、JFL環境にある中国人日本語学習者向けの、運用力につながる文脈を構築する可能性を探っています。異文化コミュニケーションはわたしの研究対象の一つです。人は誰でも同じように物事を見たり、考えたりするわけではありませんので、異なる文化の気づきも重要だと考えられます。OKマークは日本人特有の非言語コミュニケーションではありません

ませんが、中国においてもそのジェスチャーはよく使われます。大丈夫を意味することも可能ですが、ほとんどの場合数字の3を表します。それを区別するために、OKの意味を表すとき、中指、薬指、小指をちょっと曲げる人もいます。その場での表情とことばを合わせて考える必要があると思います。人とのコミュニケーションは非言語活動に頼るところも大きいと思われるので、同じジェスチャーであっても、それぞれの文脈あるいは場面で捉える必要があると思います。個人的には「視点」に着目した文法習得に興味を持っていますが、ある意味では、非言語コミュニケーションの習得のほうが難易度が高いと考えています。

最後に、大阪大学に着任して1年が経ちました。1年目は多くの気づきをもたらしてくれました。まだまだ未熟ではございますが、まわりの先生方に励まされ、大阪大学で充実した日々を過ごしております。これからも多くの出会いを大切にしながら、研究に教育に励んでいきたいと思っています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

## 言語社会専攻

マルチリンガル・エキスパート養成プログラム担当 特任助教

久保 公人

慣れ親しんだ箕面キャンパスに着任できて嬉しい限りです。大阪外国語時代のことが、初めてこのキャンパスを訪れたとき、北千里から乗り込んだバスの中で、どこへ連れて行かれるのだろうと尼谷の山を越えるあたりで不安にかられたものです。少し歩けば地下鉄の駅に出会う土地で育ちましたので、箕面キャンパス周辺のバス以外に交通機関がない土地に足を踏み入れるのは白地図の上をさまようがごとくでした。外国語学部生それから言語社会専攻の大学院生として通学するうちに頭の中で空白地帯に地図が描かれていき、今では地元の住人並みに知り尽くした土地となりました。

担当授業は豊中キャンパスで教えることとなりますが、その他の仕事は箕面キャンパスで行います。私の仕事は二つの大きな柱からなりますが、その一つがネイティブ教師による英語プレゼンの個人指導のコーディネーターにあたります。大阪大学内の文系・理系を問わず幅広い分野の大学院生と研究者が国際学会でのプレゼンテーションの準備として受講されています。私自身、昨年は国際学会で二度発表しており、その際に本プログラムを実体験しましたが、なかなか役に立つ内容でした。受講生の中には、英語でのプレゼンテーションが不安であるがゆえ、何かとご相談いただくこともあります。自身の経験に照らして懇切丁寧なアドバイスをさせていただければと思います。

もう一つの柱は在学生在が副専攻的に他学部の分野を学修できる学部横断型プログラムのコーディネーターです。私の担当する授業はこのプログラムに含まれております。英語・英米

文化プログラムの一部を構成する内容で、英語文学と英米文化の授業を教えています。私はアメリカ文学を専門分野としております。ヘミングウェイの暴力とライティングをめぐる内容の博士論文で本学で博士号をいただきました。最近、イギリス文学、というよりはアイルランド文学というほうが正確ですが、イエイツの研究も行っており、このあいだ国際学会でイエイツの詩と笑いについて発表したところです。文学作品に現れる近代の影響に自分自身の関心があるようだということに気づきましたので、その方向で研究していくことと思います。その成果を活かして講義の中身を充実させていきたいと思います。